

① 「発問」について

発問が中心発問を含めて4つと多くなってしまったが、元さんの心の動きや葛藤を考える上では必要な発問であった。発問3で、母親からの手紙を読んで元さんが自分のしたことをどう思っているかを考え、伝え合ったことで、元さんの思いをより深く考えることができていた。このことが、中心発問「元さんはどうして自ら職を辞したのだろうか」につながり、ねらいとする価値について、生徒はより深く考えることができた。

② 「伝え合う活動」について

発問3において、自分の判断に対する元さんの思いを、5段階の数直線に表しその理由も考えることで、どちらか一方の理由だけでなく、元さんの複雑な心の内を考えることができた。

机の配置をV字型にすることで、生徒同士が顔を見て伝え合う活動が行える場づくりができ、少人数での率直な意見交換を行うことができた。近くの人との少人数での話し合いという点では有効であったが、全体の場での生徒同士の意見交換はあまり行うことができなかった。お互いの顔が見やすいというV字型配置の利点や、三角コーンを用いた意思表示のよさを活かせるように、生徒同士の語り合いの場が作れるようになるとさらに深まりのある活動になる。そのためにも、教師が授業のコーディネーターとなり、生徒の発言を全体に広げられるような指導技術を磨いていく必要がある。

○研究の概要（県立渋川青翠高等学校の取組）

1 本校における道徳研究の在り方と研究課題の設定

- 校訓「礼・誠・明」は、道徳的には「公共の精神を養うとともに、社会性の育成を図り、より良い人間関係を築こうとする力の育成」を目的としたものである。
- より良い社会を実現するため、社会性や道徳心の育成、マナー向上などの道徳教育を効果的（意図的、計画的）に実施できる最終教育機関として、「信頼される社会人として活躍する力（「礼・誠・明」）の育成」を学校教育活動の目標とした。
- 本校は総合学科高校のため選択科目が多く、クラス単位での授業が少ない。そこで、クラスの団結力を高めるため、特別活動を重視した実践研究を行うこととした。

2 体系的・組織的な道徳教育の推進

- 「道徳教育実践推進委員会」を組織し道徳教育の実践研究の推進母体とした。また、先進校を視察し本校との比較や取り入れるべき内容について検討した。
- 「道徳教育全体計画」の活性化のための見直しと職員の共通理解を図るための職員研修を複数回実施した。特に、道徳教育について職員の理解を深めるため、専門の外部講師（大学教授）を招き、本校の道徳教育推進についてもご指導いただいた。
- 全校生徒を対象に、中学校の特別の教科「道徳」から22項目のアンケート調査を実施し、生徒の道徳的意識の実態を把握し、意識が低い項目の改善に努めた。
- 特別活動については、生徒の実態調査にもとづいて各種行事における道徳的目標を設定し、生徒会活動とホームルームとの連携を強化して実施するよう配慮した。

3 特別活動、家庭や地域との連携における取組

- 一日体験学習会や学校紹介、各種の地域イベントなど、多くの学校行事において生徒会や部活動の生徒を中心として、主体的に活動させることに留意した。
- マラソン大会や文化祭などの学校行事に際し、道徳的な目標を持たせて臨むことが「信頼される社会人」への成長に結びつくことを意識させるよう配慮した。
- 渋川広域圏の小学校、中学校、高等学校の代表による「いじめ防止フォーラム」を主催し、生徒会を中心とした企画、準備、運営によりフォーラムを開催した。
- 県の研究指定による「私たちのスマホ利用ルール作り」において、生徒会を中心に全校生徒のスマホ利用実態調査を行い、その結果を生徒へフィードバックしながら、外部講師の講話やワークショップを開催し、合理的な4つのルールを策定した。
- 生徒アンケートで道徳的意識が低かった「向上心や克己」「強い意志」について考える機会として、外部講師（ザスパクサツ群馬監督：服部浩紀氏）による講演会を開催した。

4 公開研究授業の実施

- 全校生徒を対象としたアンケート調査により、本校生徒の道徳的意識が低い3つの項目について、学校行事により改善を図る試みを公開授業のテーマとした。
- 文化祭という大きな学校行事の実施にあたり、全校生徒一人ひとりに自分の意識が低いと考える1項目を選択させ、道徳的目標を立て意識的に取り組むよう促した。
- 文化祭終了後、生徒各自の道徳的目標への取組についてアンケート調査した。
- 「信頼される社会人になるために」というテーマのもと、文化祭での各自の道徳的活動を他の生徒と検証し、体験や考えを共有するHR活動を公開した。

5 研究の成果

- 職員は、校内研修や講演会、学校行事の道徳的取組をとおして、高等学校教育における道徳教育の在り方を学び、教科指導を含めたあらゆる場面において道徳教育を推進する意識が向上した。
- 生徒は、日常生活や学校生活のあらゆる取組において道徳的目標を設定することで、自己の自立心や向上心、社会性が高まることを体験し、「信頼される社会人として活躍する力」の重要性を意識することができた。

6 研究の成果と課題

(1) 研究の成果

- 講師を招いての基礎研修と日々の授業実践、授業研究会の積み重ねにより、教師の授業構想力、伝え合う活動の工夫等の質的な向上が見られた。その結果、生徒が道徳の授業に主体的、意欲的に取り組む姿が見られた。
- 「伝え合う活動」を道徳だけでなく、教科の指導においても積極的に取り入れることで、生徒の発言への抵抗感が減り、自分の思いを少しずつ他人に伝えられる場面が増えてきている。同時に生徒の道徳的価値への関心の高まりも感じられ、学校全体に落ち着きが増してきた。
- 保護者に本校の道徳教育の取組に関する情報を積極的に伝えたり、実際に授業を参観してもらったりすることにより、保護者の道徳教育への関心と期待の高まりが見られ、授業や使った資料などについて家庭でも話題となる機会が増えた。さらに親子のコミュニケーションや、学校と家庭の信頼関係をより一層深めることにもつながっている。

(2) 今後の課題

- 道徳教育を学校教育活動全体で行っていくために、道徳教育全体計画を整備し、それに基づいた取組を推進していく。また、全体計画に基づき、実態に合った道徳の年間指導計画や全体計画の別業に沿った授業を行っていく。特に、重点項目に掲げた内容については行事や時期などに関連付けて、複数回道徳の授業を行うことでより一層豊かな心を育てていきたい。
- 資料を効果的に活用し心に響く道徳の授業を展開するために、研究授業を積み重ね、教師一人一人のさらなる授業力の向上に結び付ける。また、話し合いのルールを考えたり、話し合いの形態や方法を工夫したり、話し合うための教材を活用したりして「伝え合う活動」が生徒同士で価値を追求するための場となるよう研究を続ける。
- 道徳教育啓発リーフレットの配布に伴い、保護者の理解を深めるとともに、定期的なアンケート調査を基に成果を共有しながら、課題を明確にしてさらなる教育活動の展開を目指す。

7 参照できるホームページ

<http://www.nc.t-minami-jhs.gsn.ed.jp/> （富岡市立南中学校）

県立渋川青翠高等学校の研究内容

1 学校の概要

学校名	所在地	電話番号	生徒数
群馬県立渋川青翠高等学校	渋川市渋川3912-1	0279-24-2320	579人

2 研究課題

「信頼される社会人として活躍する力（「礼」「誠」「明」）の育成」

3 研究課題の設定理由

「礼節を重んじ」、「誠実に」、「賢明に」生きるということは、人間関係を大切に、いろいろな人の立場を理解した上で、寛容の心を持ち、謙虚に、そして、自身の目標に向けて前向きに生きていくことである。高等学校教育は、社会に出る直前の学ぶ場であり、本校では、「公共の精神を養うとともに、社会性の育成を図り、より良い人間関係を築こうとする力」を育成することを主眼に据えて道徳教育の在り方を研究し、体系的、組織的かつ意図的、計画的に推進する必要があると考えた。

4 研究の概要

(1) 研究のねらい

校訓「礼」「誠」「明」の実現には、道徳教育の推進が不可欠であり、そのことが高等学校学習指導要領の目指す「生きる力」の育成にもつながると考え、本校における体系的、組織的な道徳教育の在り方について研究することとした。

(2) 研究の内容

① 基礎研究と職員の共通理解の推進

○ 全校「アンケート」の実施

生徒の実態を把握するため、平成27年3月施行の新学習指導要領による中学校の道徳項目に基づき22項目の「今の自分を振り返って」というアンケートを実施した。「良くできている」もしくは「だいたいできている」と回答した生徒が全校生徒の70%に充たなかったのは、「向上心、個性の伸長」、「希望と勇気、克己と強い意志」、「郷土の伝統と文化の尊重、郷土を愛する態度」、「国際理解、国際貢献」、「自然愛護」の5項目であった。

○ 共通理解を図る研修会の実施

6月30日に第1回の職員研修を実施し、これまでの「道徳教育全体計画」を見直し、各教科の年間計画を検討した。また、12月7日には、群馬大学教育学部教育臨床総合センター副センター長の黒羽正見教授を講師として、「道徳教育について」と題した講演により、道徳の授業はどのように展開していったらよいかという基本的な知識と具体例等について研修した。

回答について	
①良くできている	②だいたいできている
番号	アンケート項目
(1)	何事も自分で判断し、責任ある行動をとっている。
(2)	毎日、規則正しい生活を送っている。
(3)	向上心を持ち、自分の長所や個性を伸ばそうと努めている。
(4)	自分の将来の目標や希望に向かって具体的に努力している。
(5)	物事を客観的に見ること、真実を物事の上で判断し、行動しよう努めている。
(6)	家族や周囲の支えを感じ、それに応えるよう努めている。
(7)	礼儀の意義を理解し、時と場に応じて、礼儀正しく人と接している。
(8)	心から信頼できる友達を持ち、互いに助まったり、高め合ったりしている。
(9)	他の人の意見を認め、話し合ったり教え合ったりしている。
(10)	法や校則など、規則を守って行動している。
(11)	正義を重んじ、誰にでも公平公正に振舞おうと努めている。
(12)	社会生活において人に迷惑をかけることなく、マナーを意識して行動している。



○ 先進校への視察①「茨城県立江戸崎総合高等学校」

11月11日に実施された、1学年での道徳の公開授業を視察した。副教材「ともに歩む」を用いるだけでなく、道徳性の高い絵本や個性を知る為のエゴグラムを活用し、適宜ICT機器を用いて多種多様な授業を展開していた。また、定期的に地域で活躍する社会人や卒業生を講師に招き、講演会を行っていることなども参考になった。

○ 先進校への視察②「茨城県立石岡第二高等学校」

12月3日に実施された、2学年での道徳の公開授業を視察した。副教材を用いるだけでなく、各担任が指導案を作成し、自作のワークシートを用いて授業を展開していた。また、授業の進め方として教員側は道徳的なこと教え込むといった考えではなく、対立軸を明確に生徒に示し議論させることが重要であるというスタンスを学ぶことができた。

② 体系的・組織的な道徳教育の推進

○ 「道徳教育全体計画」の見直し

「道徳教育指導者養成研修（中央指導者研修）」や校内研修の討議を経て、校訓を中心とした、より具体的な目標を挙げた平成27年度「道徳教育全体計画」を作成した。特に、総合学科であることから「産業社会と人間」の学習内容と学科、学校行事を重視した内容とした。

また、本研究のねらいや各種教育活動との関連を具体的に示した指針を作成し、職員の共通理解を深める資料とした。



○ 講演会の開催

12月22日にガスパクサツ群馬監督の服部浩紀氏を講師として「夢に向かって」と題した生徒及び保護者対象の講演会を開催した。高校時代からの華々しい経歴の陰にあった大きなケガや苦悩、ターニングポイントなどの迫力ある講演後には、生徒から多数の挙手があり、サッカー人生を通して学んだ「向上心や克己心」、「強い意志」について、質疑応答が行われた。生徒には、大きな感動とともにこれからの生き方について考える良い機会となった。



③ 特別活動、家庭や地域との連携

○ 特別活動における取組

望ましい集団活動をとおして個性の伸長を図り、自主的、実践的な態度を育てるため、文化祭やマラソン大会、「私たちのスマホ利用ルール作り」などに取り組む際、生徒にその意義を考えさせ、生徒それぞれに目標を持たせながら企画、運営させるよう留意した結果、各取組において随所に生徒のアイデアや意見が生かされ、生徒の主体的な活動が展開できた。

○ 家庭や地域との連携

生徒の主体性を育成するため、「いじめ防止フォーラム」を生徒に運営させたり、「福祉交流」の交流内容を生徒たちに話し合わせ、考えさせたりした。また、今年度初めて企画された11月21日（土）の「しぶかわ市民まなびの日」と1月16日（土）の中学2年生及び保護者を対象とした「渋川地区県立学校紹介」では、生徒会や部活動の生徒たちが中心となり学校紹介を行った。いずれも生徒の自信に満ちた発表に会場からたくさんの拍手を受け好評であった。生徒は大きな達成感と充実感を感じている様子が伺えた。



5 実践研究事例

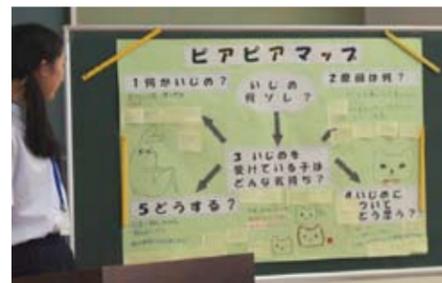
(1) いじめの未然防止に関わる取組と「いじめ防止フォーラム」

○ いじめの未然防止と早期発見・初期対応の充実を目的に、各学期に「悩み調査（記名式）」と「学校生活アンケート（無記名式）」を実施している。記名式では回答しづらい設問に配慮し、無記名式と併用することで実態把握に努めている。

また、8月には本年度本校は「渋川広域圏いじめ防止フォーラム」の幹事校となり、小学校12校、中学校12校、高校5校とPTAが各班に分かれいじめ防止に向けた「ピアサポート体験」や班別協議を行った。運営は本校生徒会が中心となったが、「自分たちが解決していく問題」としていじめ問題を受け止め、企画、運営できたことが本フォーラムでの最大の功績であった。



昨年度、本校では全校で「いじめ防止LHR」を2時間×2回を実施し、2・3年生は全員今回のピアサポート体験をしている。本フォーラム開催前には、「小学生が高校生の悩みに解決策を書くのは難しいのではないか」という意見もあったが、各班の高校生リーダーが中心となって、心温まる素敵なアドバイス「解決の知恵袋」が出来上がった。また、班別協議後の発表では、各グループリーダーがまとめを発表し、その誠実な取組と力強さに大きな拍手が送られた。



(2) 「私たちのスマホ利用ルール作り」

群馬県教育委員会から研究指定を受け「私たちのスマホ利用ルール作り」に取り組んだ。この事業は、話し合い活動等とおして生徒自身がルールを策定することによりネットモラルの向上を図り、インターネットを介した問題行動やいじめ等の未

然防止に資することを目的としている。取組の経緯は次のとおりである。

- 6月17日（水） 全校生徒対象「携帯電話等の利用に関するアンケート」実施
- 7月17日（木） 代表生徒によるワークショップ
 - ① 講義 講師：(株)ピットクルー 安藤 朗 氏
 - ② アンケート結果から本校の課題を明確にする
 - ・3時間以上利用している生徒が6割以上
 - ・携帯電話等で嫌な思いをした生徒が約1割
 - ・女子はSNS、男子はゲームの利用時間が多い、等
 - ③ 講評 県教育委員会 高校教育課亀井指導主事
- 8月6日（木） ④ 全校集会 アンケート結果のフィードバック
- 8月27日（木） ⑤ HR活動 課題をもとに生徒一人ひとりがルールを考える
- ⑥ HR活動 生徒が考えたルールをグループで3つに絞る
- ⑦ HR活動 グループでまとめたものをクラスで3つに絞る
- 8月31日（月） ⑧ 各クラス案を生徒会本部役員が集約
- ～9月4日（金） ⑨ 生徒会本部でルール案策定
- 9月30日（水） ⑩ 全校集会での講義 講師：安藤 朗 氏
- ⑪ 生徒会からルールの発表
- ⑫ 講評 県教育委員会 高校教育課高橋指導主事



この取組により、次の4つのルールが策定され、全校生徒、保護者へ周知されるとともに、全クラスに掲示された。

- 1 フィルタリングを必ずかける
- 2 ながらスマホをしない
- 3 SNS上での発言や個人情報の取り扱いに気をつける
- 4 使用時間を決め、夜10時以降は使用しない

一連の活動において、生徒会本部役員や各学級委員長、副委員長が見せた活躍の姿が、後に文化祭における生徒の積極的な活動のお手本となったものと思われる。

(3) 「福祉交流」

9月15日（火）、1年生全員を対象に、「産業社会と人間」の授業の一環として「福祉交流」を実施した。グループに分かれ、特別養護老人ホームや知的障害者更生施設など8施設を訪問し、福祉現場の実態に触れる貴重な体験となった。約3時間という短い時間ではあったが、世代や健康状態で異なる多様な価値観やスタッフの想い、社会福祉全般についての理解を深めた。また、コミュニケーションのポイントである傾聴、受容、共感、の重要性を体験的に理解することができた。



(4) 「公開LHR」－文化祭への取組から信頼される社会人について考える－

12月16日（火）、全クラスを公開対象として実施したが、それまでの経緯は次のとおりである。

① 生徒の実態把握と分析

6月に実施したアンケート結果を見ると、概ね中学までの道徳教育が身につけていると考えられる。特に、「礼儀」、「遵法精神、公德心」、「公共」、「生命尊重」の

4項目は「①よくできている」と「②だいたいできている」の計が90%以上と高い意識を有しており、社会性の基礎は育成されている。

一方、「③あまりできていない」と「④できていない」の計が30%以上の項目は、「向上心、個性の伸長」、「希望と勇気、克己と強い意志」、「郷土愛」、「国際理解・貢献」、「自然愛護」の5項目であった。「国際理解・貢献」や「自然愛護」は生徒の実体験が不足しており、やむを得ないものと考えられるが、「向上心、個性の伸長」、「希望と勇気、克己と強い意志」、「郷土愛」については、充実した高校生活や「信頼される社会人」への成長過程において、不可欠な資質であると考え、この3つの資質の向上を図ることが重要であると考えた。

そこで、全校生徒が取り組む隔年開催の文化祭「青翠祭」の実施にあたり、この3つの項目の中から生徒一人ひとりが取組の目標として1項目を選び、具体的な個人目標を立てて文化祭に取り組むこととした。

全校HRで、文化祭にあたり取り組みたいと思うことを前述の3項目から選ばせた結果は「向上心、個性の伸長」が56.4%、「希望と勇気、克己と強い意志」が34.7%、「郷土愛」が8.9%であった。

また、具体的な目標の上位は「積極的、自主的な行動」が32.0%、「コミュニケーション能力を伸ばす」が10.7%、「仲間との協力」が7.8%であったが、3年生では「責任ある行動」が9.0%と学年による差異も見られた。

② 教科指導における留意事項

「向上心」や「勇気」について自信がないということが、授業や課題に対する意欲や、授業中の発言、消極的な進路選択、優柔不断な態度など、様々な場面に影響を与えていると考えられる。学校行事だけの指導ではスポット的であり、日常の授業における指導が重要となる。

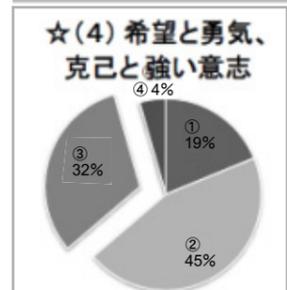
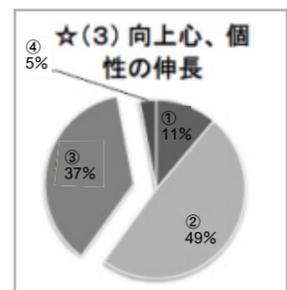
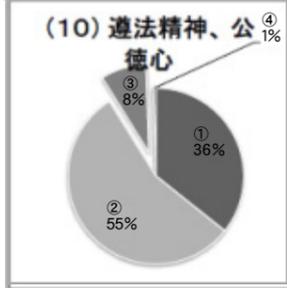
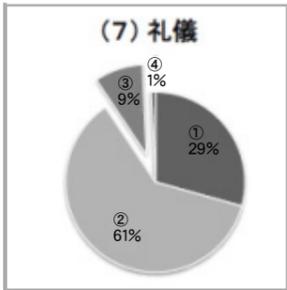
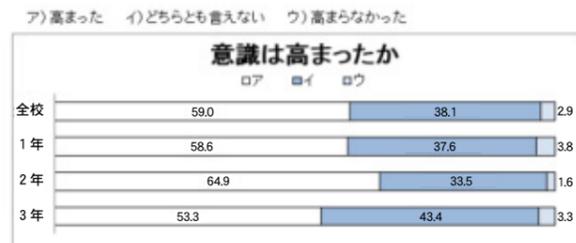
協働的な学習においては、個人で考えるべき時間や他の意見を聞くべき時間、意見を発表する時間、意見交換する時間など、目的を明確化した上で十分な時間を確保し、生徒の資質を伸ばす指導を心掛ける必要がある。

③ 文化祭への取組と意識の変容

文化祭の企画、準備、運営にあたって、生徒が自身で掲げた目標のもと、積極的に活動する姿が随所に見られた。また、職員についても、文化祭を機とした道徳教育の実践者としての意識が高まり、各所で意欲的な指導が展開された。その結果、文化祭は大成功のうちに終わることができた。

文化祭後のアンケート調査では、全校生徒の92.7%が「目標を意識して取り組むことができた」とし、33.8%が「取組目標を十分達成できた」と回答した。

また、今回の取組の結果、「道徳意識が高まった」とする生徒は59.0%となり、学校行事に際し、道徳的目標を持って臨むことで生徒の心の変容が期待できることを裏付ける結果を得ることができた。



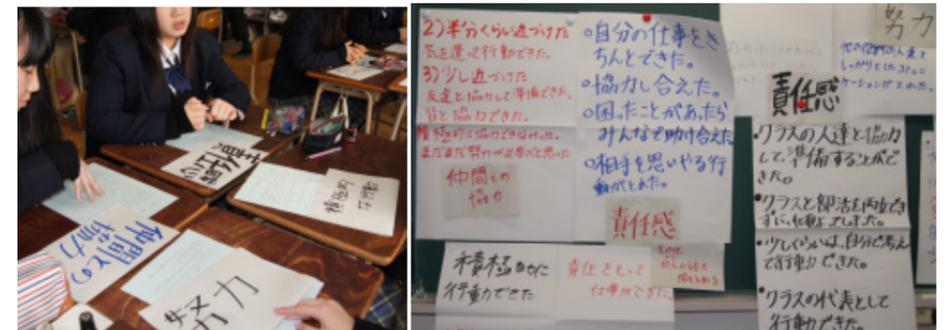
④ 文化祭での実践と事後指導

文化祭への取組をとおして、生徒の道徳的意識の変容が期待できることは、職員のみならず、アンケート調査により生徒自身も検証できている。そこで、さらに今回の実践を一步深め、このような道徳的目標を掲げた取組が「信頼される社会人として活躍する力」に繋がることに気付かせたい。そのためには、文化祭への取組を振り返ることで、他者の取組や考え方を共有し、生徒自身が考える「信頼される社会人」像や身につけたい価値観に気付かせ、今後の在り方や生き方について考えさせることが重要である。このためのLHRを「公開授業」とした。

⑤ 公開授業 (LHR) の指導案

	学習内容	時間	主な学習活動	支援及び指導上の留意点
導入	○信頼される社会人について考える。	10分	○信頼される社会人になるために、必要なものを考える。 ○授業シート1を記入。 ○それをB4の紙に書く。	○授業シートとB4の紙を配付する。 ○机間巡視し、黒板に張り出すものを決める。 ○書かれたものを2~3枚黒板に掲示する。
	○自分が信頼される社会人に近づけたか考える (中心発問)	5分	○信頼される社会人に近づけたかを考え、その理由を書く。 ○授業シート2を記入。	○机間巡視し、生徒の回答を確認するとともに、全員が書けたか確認する。
展開	○グループに分かれ、どうしてそうなったのかを話し合う。	10分	○グループでどうしてそうなったかを話し合い、模造紙にまとめる。	○3~5人のグループを作らせる。 ○机間巡視し、まとめた内容を確認する。
	○モデルグループの発表。	5分		○2~3グループの模造紙を黒板に掲示する。
	○自分の周りに信頼される社会人になれるような友人がいるかを考えさせる。	10分	○授業シート3を記入。(価値の自覚化)	○机間巡視し、書いている内容を確認する。
閉	○モデル生徒の発表。	5分	○他の生徒の考えをしっかりと聞く。	○2~3名を指名して、前に出させ、発表させる。
	○説話	5分	○教師の話聞く。	○今日の授業を振り返る。 ○日常への実践化を意識する

- (評価) ・グループで話し合いをする中で、自分の意見を述べることができたか。
 ・自分なりの「信頼できる社会人」像を描くことができたか。
 ・道徳的価値観からこれからの在り方、生き方を考えることができたか。



(5) 学校行事・特別活動等における校訓に基づく道徳教育の配慮事項の例

活動名・分野・目的等	活動の様子	配慮事項
球技大会 ○競技を通して、礼儀、友情、遵法精神、公正、集団生活の充実、感動などの心を育む。		○生徒主体の運営とし、ルール遵守、助け合い、協力して競技運営させる。
一日体験学習会 ○学校紹介をすることで、自主、創造、思いやり、礼儀、郷土愛、勤労などの心を育む。		○自主性、創造性、積極性を意識して取り組ませる。
交通安全教室 ○交通ルールや事故の危険性を学ぶことで、遵法精神や生命尊重などの心を育む。		○ルールを遵守することや公共マナーの大切さを意識して取り組ませる。
マラソン大会 ○競技を通して、自律、向上心、克己と強い意志、友情、感動などの心を育む。		○克己心、向上心、責任感を意識して取り組ませる。
文化祭 ○企画や準備、発表を通して、自由と責任、向上心、創造、公共などの心を育む。		○向上心や克己心、仲間との協力や責任感を意識しながら取り組ませる。
国際交流 ○外国の高校生との交流を通して、思いやり、相互理解、国際理解などの心を育む。		○外国文化の理解や日本文化の理解、積極性を意識して取り組ませる。

(6) 考察

生徒が道徳的な目標を持って特別活動（生徒会、HR、学校行事）に取り組むことにより、生徒自身の道徳的意識が向上することが確認できた。また、これらの取組をとおして「信頼される社会人」像を明確化させ、これに近づこうとする意識を持たせることにより、これからの在り方、生き方を考えさせる方向付けができた。

6 研究の成果及び課題

(1) 研究の成果

職員は、校内研修や講演会を通して高校における道徳教育の在り方を学び、授業だけでなく特別活動や課外活動などあらゆる場面において、道徳教育と関連づけて指導する必要性と効果を認識し、本校の道徳教育の在り方が明確化された。

また、生徒は道徳的目標を持って学校行事に取り組んだことにより、向上心や社会性、自律性が高まり、各自の持つ「信頼される社会人として活躍する力」の育成に繋がることを意識することができた。

(2) 今後の課題

今年度は、特に特別活動について実践研究を進めたが、今後は総合学科高校としての基幹である「産業社会と人間」をはじめとした各教科の授業についても、どのように道徳教育を推進すべきかについて、研究を進めると同時に推進する道徳教育の効果の測定と評価についても研究を深める必要がある。

7 参照できるホームページ

<http://www.seisui-hs.gsn.ed.jp/> (渋川青翠高等学校)

○事業の概要（藤岡市教育委員会の取組）

1 道徳教育における小中一貫教育推進体制づくり

○東中校区の小学校3校、中学校1校の児童生徒の課題を、教職員の意見や保護者・地域へのアンケート調査から把握し、東中校区の道徳教育における重点項目を設定した。
○4校の共通の取組（学年ブロックによる授業づくり、発問の工夫、道徳ファイルや道徳ノートによる児童の言葉の蓄積、家庭との連携）を決定し、9年間の学びのつながりのある学習指導の基盤を整えた。

2 実践

○4校の共通の取組を基盤とし、授業改善の視点に学びのつながりや発達段階に応じた指導の工夫を掲げて、授業実践を行った。
○「私たちの道徳」や「ぐんまの道徳」を活用した授業実践を行った。
○児童生徒の道徳性の実践の場としての児童会・生徒会活動や学校行事等を充実させた。

3 教職員の資質の向上

○学びのつながりを意識した道徳の授業づくりを意識するとともに、「学習指導案の作成→プレ授業→改善→代表授業→改善→検証授業」というサイクルのもと、学校を超えた学年ブロックを中心として協働による授業改善を図った。
○道徳の授業づくりにかかる研修会、講演会を実施し、道徳教育に係る意識や指導技術の向上を図った。

4 地域・家庭との連携

○道徳ノートや「私たちの道徳」の家庭への持ち帰りや学級通信・Webページによる授業の様子の発信、学校評議員や保護者の授業参観等を通して、地域や家庭の意見や感想をうかがう機会を設けた。
○東中校区の道徳教育の取組をリーフレット「東中校区の道徳教育」にまとめて発信し、地域・家庭と連携した道徳教育の推進を図った。
○「いじめ防止に係る啓発リーフレット」を配布し、地域・家庭・学校で連携しながら、いじめを生まない基盤づくりを進めた。

5 事業の成果

○東中校区全体で内容項目を「勇気・強い意志」「思いやり」「勤労・公共の精神」に重点化したことで、日々の道徳教育の指導のポイントが明確になり、小中9年間を見通した道徳教育推進体制の基盤が整った。
○道徳の時間の指導に対する教員の意識が高まり、児童生徒の実態に応じた発問の工夫や表現活動の工夫等、学年内の連携を図るとともに、学びのつながりを考えた積極的な実践が行われた。
○地域や家庭に道徳の指導の様子を発信したり、授業公開をしたりしたことで、道徳の指導に対する意見や感想が寄せられ、道徳教育の充実や推進につなげることができた。